

## 「何!?カフェ」実践報告

*Putting the “What!? Café” into Practice*

2017年度グローバル・エデュケーション・センター設置 全学共通副専攻「ジェンダー研究」全体活動ジェンダー・ワークショップとして「何!?カフェ」を実践した。以下はその概要を記したものである。

このジェンダー・ワークショップ実行委員は学部生や大学院生で構成され、ジェンダーやセクシュアリティへの関心や問題意識をもとに集まったメンバーである。そのようなメンバーで丁寧な話し合い、思いや気持ち、憤り、不安や不満などを共有する中で、授業以外の場や日常でジェンダー問題やセクシュアリティに関する問題を気軽に話すことができない現状が存在していることが明らかとなった。そこで今回のジェンダー・ワークショップの趣旨を、「ジェンダー・セクシュアリティに関して気軽に話せる空間を作り、社会や個人の中に存在するジェンダー・セクシュアリティ問題の解決への入り口にする」とした。誰でも気軽に参加できる空間をイメージし、カフェの形式で話す場を提供しようと考えた。「何!?カフェ」という名称には、ジェンダー・セクシュアリティに対して「なぜこういう問題があるのか、何を考えてもいい、何をしなくてもいい。ジェンダーやセクシュアル・マイノリティをめぐり、一緒に生きづらさや苦しさを考えていく切口にしたい。」という思いを込め、「何」というワードを用いた。チラシには、「何をしなくてもいい」、「何を考えなくてもいい」といった言葉も掲載した。このワークショップが何か強い問題意識をもっていないと参加できない空間であると思われないようにするためである。ジェンダー・セクシュアリティに関する問題を自由に気軽に話せる空間であり、それらの問題を考える入り口に立つことのできる空間として、「何」という言葉の掲載は必要

不可欠であると判断した。

このような想いの中で実践された「何!?カフェ」では、上記で示したようにチラシ作りなどにも多くの工夫がなされている。例えば、「ジェンダー」や「LGBTQ」などの専門的な言葉でチラシを構成するのではなく、多くの人が足を運んでもらえるように、実行委員などが考える思いや気持ちをそのまま言葉にしたものを多く掲載した。「デート割り勘宣言」や「女子力なんてクソクラエ」、「なんで女は一般職？」など、これらの言葉に共感したり、考えてみたりしたいというような気持ちになれるような工夫をした。「何!?カフェ」は早稲田キャンパス、戸山キャンパス、理工キャンパス、所沢キャンパスそれぞれの教室で実施したが、空間作りも工夫した。無機質になりがちな大学の教室にテーブルクロスや飲み物やお菓子などを用意し、カフェらしい明るい空間を作った。また、参加者の「何」を引き出しやすくするためや色んなことができると思える空間にするために、チラシに掲載した言葉などを会場内の壁に貼り出したり、テーブルにはジェンダー、セクシュアリティ、フェミニズムに関連する書籍を用意したりした。参加者が手に取って、色んな生き方や、「何!?」を表現する色々な方法や、男女の関係のあり方を変えていくための色々な方法があると思えるような本やDVDを選んだ。

そのような準備の中で迎えた当日の進行は、まずはこの「何!?カフェ」の趣旨説明とグラドルールを共有するところから始まった。グラドルールは「何!?カフェでは...言いたくないことは言わなくて OK 今日の話はここだけお互いの話をじっくり聞こう」というものであった。自己紹介に関しても、必ずしも本名を名乗らなくてもよく、呼ばれたい名前で自己紹介するようにした。言わなくてもいいことは言わなくてもいいという趣旨から、名前や所属よりもその人がいることが大事だという思いがそこにはある。当日は自己紹介の中で出てきたような関心事などを話し合ったり、チラシに掲載されていた文言を中心に話し合ったりする場が展開された。参加者同士が緩やかに繋がり、普段の思いを言葉にし、すっきりした表情や、新たに考えなくてはならない問題と出

会ったというような意見も見られ、実行委員の「何!?カフェ」に込めた思いが広がっていく空間となったと考えられる。

今回の「何!?カフェ」の実践は、「ジェンダー・セクシュアリティに関して気軽に話せる空間を作り、社会や個人の中に存在するジェンダー・セクシュアリティ問題の解決への入り口にする」という趣旨を果たすことを微力ながらもできたと考える。実践の中で、大学が抱える問題の多さも感じた。課題は多いが、この課題を可視化できたことは紛れもない事実で、このような可視化と問題提起、改善に向けての実践・省察の繰り返し、一步一步、大学をジェンダー・セクシュアリティの問題への解決と「自分らしく生きる空間」、「ジェンダー視点で社会を捉え直すことができる一人ひとりの発展の空間」へと前進させる。その一步一步をこのジェンダー・ワークショップは刻み、進んでいると感じる。10年、20年、もっと先かもしれない。しかし、大きな流れの中で確実に前進し続けるはずだ。そして、この「何!?カフェ」の実践に向けた準備と報告書作成による省察は、実行委員にとってかけがえのない貴重な経験になった。

筆者は、今年度から公立の高校で教員をしている。大学で培ったこうした経験を生かすために日々奮闘中であるが、教員社会の多忙さや負の学校文化などとも戦い続けなくてはならないことをこの半年で実感している。大学での教育がジェンダー教育最後の砦と言われる昨今、高校でのジェンダー教育の必要性も問われ続けるであろう。その一助となるため、恩師の村田晶子先生や矢内琴江先生、弓削尚子先生のように学び続ける教員であり、教育者でありたいと思う。